

# 生産者に水稲の初冬直播き講習

## 導入の足がかり探る

八幡平市の  
実験ほ場  
10アール当たりの収量540キロ



水稲初冬直播きの生産者向け講習会で苗の生育状況について説明を受ける参加者

岩手大が開発した水稲栽培の技術「初冬直播き（じかまき）栽培」の第5回生産者向け講習会（JA新いわて八幡平稲作生産部会、同大農学部主催）が26日、八幡平市野駄の「かきのうえ」（立柳慎光代表）の実験ほ場であった。県内と青森、宮城の生産者ら約20人が参加。従来「春の移植（苗植え）」に代わる冬の播種（はしゆ）の水稲栽培について実地で説明を受け、導入の足がかりとした。

初冬直播きは、雪がらが中心になって研究降る前の11～12月に種を進め、2018年度もみを田んぼにまき、積雪期の「貯蔵期間」エクト（3カ年）に採るを経て、翌年秋に収穫。今年度が2期目の技術を。春に集中する農作業の分散化を図る。農業者の高齢化や担い手不足に対応しながら安定生産につなげるもの。同大農学部の下野裕之教授（49）

最終年度になる。かきのうえは20年秋から初冬直播きに取り組み、今年で3作目。今期は22年11月中旬、31粒の水稲のうち、0・6粒に種子コーティ

ングしたあきたしまち（一部つきあかり）の種を播種機を使ってまいた。

最も気を使ったのは

播種の深さで、出芽率が高いとされる地表から1センチほどになるよう調整した。冬期間を経て出芽率は約50%で、6月26日時点の苗立ちも良好。21年産、22年産ともに10アール当たり540キログラム前後の収量があり、移植と比較しても同程度の収量を確保した。

かきのうえの水稲のほ場では、春播きの乾田直播、移植、初冬直播きに取り組んでいるのは、収穫期は数日から1週間程度ずれる。春の作業の分散と合わせ、効率的な作業サイクルを確立しつつあるという。

立柳代表（44）は「高齢化により（水稲を）やめていく人が多い中で、育苗に必要なハウスの建設などが不要で、いまいる人や機械で作付面積を乗せできる同技術のメリットは大きい」。次年度は、初冬直播きを5センチ以上に拡張予定で、将来的には水稲50粒のうち14粒を初冬直播きで生産を目指す。

盛岡市下田の農業、山本藤幸さん（40）は「今後も水稲を続けていく上で、知っておきたい技術。播種機などの準備ができれば導入の可能性が見えてくる。そのためにも地域の農地整備が進んでいくといい」と話した。全国の水稲の直播面積（春の播種含む）は2%にとどまるが、寒冷地では面積が増え、22年までに初冬直播きに取り組んでいるのは岩手、宮城、山形など20生産者、栽培面積は40センチになっている。下野教授は「この6年間の成果をマニュアル化し、生産者がさらに使いやすいようにしていきたい」と、研究成果を踏まえた実用化と普及を目指す。

※盛岡タイムス 令和5年6月27日付/1面  
※この記事は盛岡タイムス社の許諾を得て転載しています。